

## 平成 27 年度 第 2 回遠野市史編さん委員会 会議録

日 時 平成 27 年 11 月 1 日 (日) 14 : 00 ~ 16 : 00  
場 所 遠野市立図書館 視聴覚ホール  
出席委員数 10 人中 10 人出席  
出席委員 赤坂 憲雄  
大橋 進  
兼平 賢治  
熊谷 常正  
斉藤 利男  
佐々木剛之  
菅原 伴耕  
藤田 俊雄  
松本 武則  
山影 勝美

事 務 局 小向 孝子 遠野文化研究センター部長兼市史編さん室長  
前川さおり 市史編さん室次長  
糠森 千明 " 主任  
熊谷 航 " 主任

(進行 : 前川次長)

### 1 開会

### 2 委員長挨拶

大橋委員長 前回編さん委員会が立ち上がり、少しずつ活動してきた。本日の会議は本格的に事業が始まる来年度の事業計画等についてご審議いただきたいのでよろしくをお願いします。

### 3 経過報告

(熊谷主任 資料にもとづき報告)

### 4 協議

#### (1) 現代編の進捗状況と今後のスケジュールについて (別紙資料 6)

(糠森主任 資料にもとづき説明)

大橋委員長 ご質問、意見を伺う。山影委員が調査研究員の座長をされているので、補足があればお願いします。

山影委員 事務局の説明の通りだが、私の意見としては業者の選定をもっと早くして業者とのやりとりをしながら進めるのがより良い内容となるという思い

はある。

大橋委員長  
小向部長

業者を選定するという事は、印刷も執筆もお願いするという事か。業者はプロポーザルで選定したいと考えている。市の例としてこれまでも東日本大震災後方支援記録誌や遠野物語発刊百周年記念誌などをプロポーザル方式により業者を選定し、資料を提供して制作したという経緯があるため、現代編に関しても可能ではないかと考えている。当初この計画を作成した際はH30、31年度の2か年契約ということで、H30年度当初の契約と考えていたが、刊行のお披露目をいつのタイミングでするか、また、作業の進捗状況によってH29年度の契約にもなり得ると考える。

大橋委員長

プロポーザル方式による業者選定については、前回の委員会で説明があったかと思うが、業者選定の時期等について、もっと早くしたほうが良いのではという意見もあります。

山影委員

これまでの経験で、慣れている業者は、様々なアドバイスもたくさんしてくれるので、互いにやり取りをしながら進めたほうが良いと考える。

大橋委員長  
藤田委員

八戸市史の場合はどうでしたか。

八戸の場合はプロポーザル方式はとらなかったため、各部会の執筆委員を選定して、執筆委員の下に調査協力員というのを置き、資料収集等は調査協力員が行い、執筆の方は執筆に専念していただき、校正機関がありということで進めた。

熊谷委員

遠野市史の一環として現代編を出すということであれば、調査研究員の方々とか我々編さん委員が執筆に関わらないというのは根源的なところだと思う。執筆するのは大変なことだと重々承知だが、プロポーザルで選んだ業者に文章を付託するという事は、現代史をどのように考えるかということ、少なくとも遠野市から付託を受けて成立している調査研究委員会や市史編さん委員会の責任性はどうなるかということを見ると、プロポーザルで業者に任せるのはいかがなものかと。市史だということからすると疑問。もう一つは、最初に出す物をプロポーザルで出すとそのデザインは踏襲されるということになる。要するに現代編の装丁と他の装丁に一貫性を持たせることを考えると、基本的な枠組みを作ったうえでプロポーザルに出すということにしないといけないと思う。現代史をどのように捉えるかについては、歴史学者の斉藤先生のご意見を伺います。

斉藤委員

熊谷委員がおっしゃったとおりで、これだけのスタッフがいるので調査研究員や市史編さん委員に書いてもらうほうが良いものができると思う。市の広報紙なら業者に委託してもかまわないが、歴史というのはどんなものでも、一つの物の見方、考え方、現代編でも現代をどう振り返るか、総括するかという問題が出てくる。人によって違いが出てくる。市町村史の場合は一人の学者ではなく、みんなの合意が必要なわけだが、それを業者に任せるというのは正直に言うと無理だろうと思う。

赤坂先生

このような形で業者にお任せするのは、危ういと思う。市町村史の現

代編は、際どい部分も出てくると思う。そういうものが仮にでてきた際に業者にそれを委ねて、これは都合が悪いから消そうとか、歴史は必ずそのように判断しなければならない場面が出てくる。現代史は今生きている人たちにつながるため、なおさらである。業者は歴史感をもって執筆するわけではないと思うので、危ういと思う。

兼平委員

それぞれの市の市史は特色がある。初めに市としてどのような市史を作りたいのかを持っていないと、現代編以降に発刊する市史との連続性、一体性にも関わってくる。従って、市としてどのような市史を作りたいのか、それに対して編さん委員としてアドバイスできることは何か土台にあり、市民目線で親しみのある市史あるいはより学術的な市史、などのビジョンを示し、例え業者に委託するとしても市がリーダーシップをとらなければ業者任せになってしまう、一体感がなくなってしまう。

熊谷委員

そのためには、改めて遠野とは何だ、遠野というところはこういった場所なのかということ、編さん委員会や調査協力員会議等できちんと確認しておく必要がある。

まずは遠野という地域がどうゆうところなのかという認識を共有し、そこから遠野を遠野ならしめた理由は何なのかということの時系列でたどっていくということが、先ほど兼平委員がおっしゃった市としてのポリシーだと思う。そのポリシーをきちんと打ち立てたうえで編さんを進めていかなければならないと思う。特に、現代史は今生きている市民に直結するものであるため、より慎重な、適正な判断が求められる。全てのことを載せるわけではなく取捨選択というところの責任が出てくる。その責任を担うためにも基本的なポリシーというものを共有するという場が必要ではないかと思う。

山影委員

委員の意見を聞き、編さん委員会できちんとした方針を決め、それに沿って現代編を作っていくかなければならないというのを改めて感じている。

佐々木委員

最初の調査研究員会議でも誰が執筆するのかという話になったが、市の説明では執筆は業者をお願いするということがあった。調査研究員は皆そのような認識で進めている。

菅原委員

私も他の委員と同じ危惧を抱いている。今の印刷会社は専任のライターがおらずほぼ外注であるため、編さん委員の先生方以外にお願いすることも懸念される。印刷会社が一番お付き合いのある人に執筆依頼するのではという心配もある。

また、調査研究員のほうで年表を大・中・小などの振り分けをするというのは時系列的に必要であると思っているので、年内には旧遠野市、旧宮守村で班を作り、整理されると思う。

松本委員

私どもがどのように関わっていくのが問題になってくると思うので、方針を決めておく必要があると思う。

小向部長

まず、基本的な市の方針を作らなければならないというのはその通りである。というのは、この事業は今年度から始まっているが、計画より

先行して進めているところ。今年度は通史編の資料となる南部家文書の解説を始め、来年からの資料調査をどのように進めていくか、現代編に関しては資料を収集するにあたって年表の出来事を大ききごとに振り分ける作業を行っている。振り分けたものがそのまま載るというわけではなく、どのような資料の収集が必要になるかという作業をしていくことになると思う。そのように必要な資料を集めながら現代編をプロポーザルにしたという理由は、実際のところ執筆が一番問題になるだろうということがあった。それをどなたかに書いていただくことになると思うと苦労されることになるということ、また、これまで市が業者に委託し作成した震災記録誌や遠野物語 100 周年記念誌なども業者に全てお任せではなく何度も市や編集委員などで内容確認や校正をしながら作成したという経緯もあるので、現代編に関してもプロポーザルで可能ではないかと考えた。

また、基本的なスタイルを決めたほうが良いのではというお話についても、八戸市さんから色々と話を伺っており、八戸市史も最初のスタイルをきちんと決め、それを基本としながら刊行ごとに業者選定を行ってきたようだが、毎回基本のスタイルは変えなかったということもあり、そのようなことを念頭におきながら、現代編の編集を先んじて行っても大丈夫ではという目論見があり、この計画を作ったところではあった。

大橋委員長 結局、遠野市としての主体性が不明確であると各委員から言われたと思う。

小向部長 私たちとしても資料がない現段階で、それを決めることはできない。先んじて進んでいるというのは、そういう意味もあり、この2年間の中で基本の方針を決めていきたいと考えている。

熊谷委員 今、小向部長がおっしゃったように、資料P8の作業というのは、編さん委員会で基本方針を議論するための基本的な情報を作成するための作業であるということでしょうか。

小向部長 基本的な資料がないと皆さんにご審議していただくこともできないため、その資料である年表を確認しているところである。

大橋委員長 市民総参加的な市史を編さんするということになってくと思うのだが、単なる年表を基にした年代的なものでなく、市内で活躍している方、団体など様々な分野の歴史もあることから、取り上げていかなければならないと思う。

小向部長 年表に記載していることに関して、調査研究員の方々の情報だけでは分からない部分もあるので、市民からの聞き取りをするなどの肉付け作業をしていくことが、基本方針を審議するための資料づくりに必要になると考える。それを調査研究員で進めたいと考える。

大橋委員長 調査研究員の皆さんが年表を作成し資料を集めながら、遠野市の特徴、市民憲章というものもあるのだが、そのようなものを土台にし、昭和29年から約50年間の歩みをしっかり検証し、このような市史を作りたいという目次を作っていただくということでしょうか。先ほど熊谷委員

からも現代編のスタイルが以降に刊行する市史にも影響するとの意見もあったことから、トータルの計画がないと現代編に携わる方々も大変だと思ふ。最初に提示した刊行計画で現代編から通史編までであるが、何刊で1刊何ページくらいにするのかということも決めていかないと一貫したスタイルの市史ができないと思ふので、今日の委員からいただいたご意見をベースにし、さらに具体的な刊行計画を作成しなければと思ふ。

齊藤委員

市当局がどういうことを考えているかが大体分かった。この計画であれば、市の広報紙以上のものは作れないと思ふ。そのようなものを作ろうとしているのかということである。どういう内容のものを作るのかというのは、常に議論となりとても難しい問題である。遠野市としてどのような市史を作るのかを編さん委員会の場で議論するというのも実は大変である。私に関わってきた一例をあげると、資料編は問題ないのだが、通史編は必ず問題が起きる。それは、中世史の場合だとそれぞれに歴史観があり、必ずそれに対してクレームがつく。それは自治体史であるので、ある偏った特定の歴史観であってはならないというものである。そのような問題を常に抱えながら自治体史を作っていかなければならない。ただ、我々に言わせれば偏らない歴史観などなく問題はどれだけ市民の納得を得られるかが勝負だと思っている。現代編はよりストレートにそのような問題が生じると思ふ。はっきり言えば、平成の大合併もしないほうが良かったと感じている方もいるはずなので、それを書くかどうかという問題も起こってくると思ふ。従って時間がかかるかもしれないが、どういうものを作るのかということに参加する方々が納得しない限り進まないと思ふ。

赤坂委員

他の自治体史の例だが、現代編をプロポーザル方式で作る際に決定した業者が私に執筆責任者になってくれと依頼してきた。それに対して、まちの人達の聞き書きをさせてもらえるかと尋ねたところ、そのような時間がないと言われたので断った経緯がある。つまり、一つの出来事に対しても色々な意見があったと思ふ。そのような市民の記憶や思い出も載せていかないと生きた歴史が見えてこない。歴史とは市の広報に載っていることではなく、多様な市民の思いがぶつかりあってできていること。だからこそ、プロポーザルで業者に任せるのは危ういと思ふ。考えたのは、市民参加を基本にしながら一人の書き手に委ねるというある意味極端なやりかただと思ふが、それはそれでその人が遠野という地域の現代史をこういうふうに見ているということで面白いかなと。あるいは、徹底して市民参加でやるのなら、市民の皆さんに書いてもらう。このどちらかかなと考える。遠野物語 100 周年の記念誌は読みやすいが、これは歴史ではない。歴史は解釈である。市長が町をつくっているのではなく、市民が町をつくっているので、市民の思いや市民の選択というものを盛り込まれなく行政文書を連ねるような形をとるのであれば、間違いなく面白くない市史ができてしまうと思ふ。従ってここが議論のしどころだと思ふ。

- 小向部長 一つは、基本方針としてお示した中に市民協働で資料を作りたいというのがあった。現代編だけが唯一市民の皆さんから色々な意見を聞いて作れると考えた。今回調査研究員の方々には現代編の土台となる資料収集をお願いしているわけだが、特定の先生や特定の方だけにお願いするということではなく市民の方々と交えるということが意識にあり、プロポーザルも可能かと考えた次第である。
- 赤坂委員 その考えも分かるが、現代史はオーラルヒストリーなどというが、市民の聞き書きもしたほうが良いと思う。
- 前川次長 遠野の 50 周年記念誌作成に携わったが、業者が書いた文章をかなり直した経緯がある。これまでの遠野市のプロポーザルによる作成だと、業者作成の文章をかなり校正している。そこから始まるのではと考える。
- 斉藤委員 普通の報告書や行政文書などと歴史の叙述は性格が違うということをどこまで認識しているのかという感じがする。そこを念頭に置いてほしいと思う。それは様々な歴史文書を見ると一目瞭然である。
- 佐々木委員 遠野の現代史を作るとすれば、現代編の調査研究員は皆市村の職員であったので、今話を聞いていてどうなのかなと思う。
- 山影委員 編集スタイルも現代編と他のものと統一性を持たなければと思うので、全体のスタイルを決めたうえで現代編を進めないで大変かなと思う。
- 大橋委員長 委員のご意見を聞いていると提案資料の平成 30 年のプロポーザルは難しいのかなとも感じる。最終的に誰か一人に執筆をお願いするとしてもそれもある意味ではプロポーザルであるが、あとは市民協働で得意分野は書いてもらうという方式もあるし、その辺のところを事務局で描いてきた出版計画とややずれてると思わなければ良いのだが。
- 小向部長 出版計画に対してというよりも、方針決定をきちんとしなければならぬということだと思う。業者に全て執筆をお願いするのか、あるいは執筆者を他に立てるかなどのスタイルは後の検討とし、業者を早めに決める。というのは、業者を決め進めていくというスケジュールは変わりはないと思う。ただ、方針決定をしなければ進まないのかなと思う。
- 大橋委員長 今の話と大きく関わるのが、資料 10 ページの 3 現代編編集準備と 4 通史編の基本構想の作成という部分である。この部分をしっかりと話し合われた状況で現代編編集がスタートすることで、山影委員の心配もやや薄らぐのかなと思う。いずれ各委員のご意見をきちんと受け止め、8 ページの現代編に関わる年表作成の活動を継続するというので、よろしいか。
- 熊谷委員 基本的な調査だと思う。
- 大橋委員長 全てプロポーザルではなく、部分的な執筆も可能とも思うので、その辺のところを考えながら 8 ページの作業を進め、9 ページの今後のスケジュールについては、編さん委員会で進捗状況を確認ということでこのように行っているわけだが、本日委員の皆様からご意見をいただいたので、それを踏まえながら調査研究員会議においての編集方針基本案検討を今年度いっぱいですっかりやり、事務局で考えている方法とどのよう

に整合性を図っていくか決めていくという形になるのではと思う。

赤坂委員

事務局が業者委託をするという提案にこだわるのが少し理解できないでいる。プロポーザル方式で行うというのはこの場で議論したのか。

小向部長

議論はしていない。

赤坂委員

この場で議論しているなら、見逃した我々の責任になってしまう。従ってかなり決定的な選択になってしまうので、その議論をさせていただきたい。

小向部長

今日の皆様の意見をその通りと思いうかがった。事務局としてプロポーザルで行うというのを決めているわけではないが、いずれ業者選定を早く決めたほうが皆さんも動きやすいのかなというのもあるので、プロポーザルもしくは委託にしたとしても、スケジュールとしては平成 30 年、31 年ということに進めたいということの確認をとらせていただきたいと思う。というのも予算の計画もあるため、このスケジュールで進めて良いかを決めていただければと思う。延ばすとなると全体的に影響が出てくるのだが。

大橋委員長

業者の選定はプロポーザルによるということだけでなく、あくまでも業者選定ということで理解して良いか。

小向部長

はい。

赤坂委員

やはり、市民が書いたほうが良いと思う。それをやらないと市民参加にならないのでは。確かに調査研究員の皆さんは元市、村職員なので、公平性が保たれないのかもしれない。自分に関わってきたことを批判的に眺めるのは無理だと思うので、公平に書ける方を入れて書いていただいたほうが良いと思う。

大橋委員長

調査研究員の人数を増員するというのは可能か。

小向部長

可能である。今おっしゃっていただいた色々な意見は今年度中に決めなければならないということではないですよ。今後調査研究員の皆さんにも意見を伺いながら、あるいは調査研究員を増員するという必要になってくると思うので、検討していきたいと思う。

大橋委員長

スケジュールについては、山影委員から業者選定を早めたほうが良いという意見はいただいたが、執筆者も含めた業者決定ではないということを確認してよろしいか。

小向部長

方針がまだ決定していないので、そういうことで良いと思う。

大橋委員長

委員のご意見をお聞きすると、現代編の執筆は業者ではなく、自力でも可能であるというご意見のようだ。

山影委員

その場合、市民参加の方法が悩みになるとことだが、皆さんからアドバイスをいただくとありがたい。

赤坂委員

聞き書きという形もある。今日の会議では斉藤委員が市史編さんに対する市の姿勢に対して深刻な問題提起をしている。

斉藤委員

市がプロポーザルにこだわるのならば、我々編さん委員がいくら議論してもプロポーザルで決めた業者が我々と関係のない人に執筆をさせて、それを任せきりになってしまっただけでは何のための委員会かということ

になってしまう。従ってプロポーザルにしても我々の誰かに執筆してもらい、書いたものは編さん委員全員でチェックするなどして納得しない部分があれば直す、最低限それはこの仕事をやるうえでの条件にしたい。

大橋委員長

そのような弊害があるので、斉藤委員はおっしゃったと思う。その弊害は取り除かなければならない。

小向部長

現代編に係る調査研究員としてお願いしている方々については、現状での人数であって動き始めたら人数を増やすこともある。

大橋委員長

調査研究員の皆さんと事務局とで、本日の委員から出た意見を尊重して進めていただきたい。年表に関しては現代編の基礎資料として進めていただくといことでよろしいでしょうか。

非常に根本的な問題を1回目に外したようで、申し訳なく思う。

これまでの意見の確認としては、現代編の調査研究員の人数を必要であれば増やすということ、プロポーザルにするか、市民協働により市民もしくは編さん委員の執筆にするかということについては、もう少し時間をかけて決定したいと思う。今の話し合いの過程では、即プロポーザルという形で業者任せにするということにはできないということであるので、斉藤委員のご意見のようにプロポーザルにするとしてもきちんと編さん委員の意向が伝わるようにしていただきたいと思う。

兼平委員

確認したいのだが、刊行計画にある刊行年度について、市として絶対動かせないのかどうかという確認は必要だと思う。市として現代編をいつまでに刊行したいのか、そのためにいつまでに方針を決めなければならないのかを確認しておかないと、業者選定にも関わってくる。従って市としていつまでに刊行したいのか、そのために我々にいつまでに方針を決めて欲しいのかを確認しないと次の会議も同じような議論になってしまうと思う。

小向部長

スケジュールとしては、提案した資料9ページのとおりである。

## (2) 平成28年度事業計画(案)について(別紙資料7)

(糠森主任 資料にもとづき説明)

大橋委員長

ご質問、意見を伺う。

遠野南部家資料の解説について、私も関わっているので少し説明させていただきます。天保三年を現在解説しているが、今月末には読み切る予定。その後はどのような編集にするのかを来月から検討したいと思っている。

熊谷委員

資料編とあるが、資料編という形で御用留書を刊行していくということか。

小向部長

御用留書やその他の近世文書等今後の調査でまだ出てくる可能性はあるが、基本的には御用留書と考えている。

熊谷委員

それは、「遠野市史 資料編」という形で出すのか。

小向部長

それについては、今後協議をしていかなければならないと考える。今年度に関しては次のステップに向けた試行錯誤をしている状態であるため、



南部家の御用留書だけが資料編とはならないとは思っているが、御用留書をお披露目できるようにしたいとは考えている。それ以外にも重要な資料が出てくる可能性がある。というのは、内部で今話をしているのが、館跡の調査もしたいなど話をしていて、それが資料編になり得るので、委員の皆さんから今日色々ご意見をうかがって、我々の認識が足りなかったところもあるし、試行錯誤で行っているところもあるので、あくまでも計画として現在考えているものなので、今後は様々な資料が出てくる可能性はあると考える。

赤坂委員 「遠野市史」の5冊の中の1冊を資料編として作るのか、市史編さんの過程で収集した資料集として出すのか、どちらにするのか。

小向部長 それについても、議論をしていきたいと思っている。

赤坂委員 今後、どんどん新たな資料が出てくる可能性があるとしたら、きっちりしたものと考えるところはみ出してしまうので、むしろどんどん資料集として刊行したほうが良いと思う。

大橋委員長 一応計画では平成29年から平成37年の間に資料編を随時刊行となっているが、どのような刊本形式にするのかについてはまだ議論していないので、御用留書にしてもある程度まとまらなければ本らしいものにならないと思う、御用留書に関してはどの程度の厚さになるかをとりあえず11月からやってみて、ある程度まとまったら刊行する形になるのかなと思うが、本の大きさ等はまだ全然議論していない。

斉藤委員 もしそうだとすると、資料集の出し方なのだが、地方自治体史の場合2通りある。「～市史 資料編」として出すのと、これだとすごく時間がかかるのだが、今の話だと最初から別編で御用留書なら御用留書を順番に刊行していく、そのほうが売れると思うし、他の物が入らないほうが良いと思う。そのほうが早く人の目に触れることができるので、そのほうが良いと思う。

大橋委員長 それでは兼平委員と相談しながら、そのようにしていきたいと思う。

兼平委員 基本的には市のほうから、遠野南部家文書の成果を活用してぜひ市史でも公開していきたいということだったので、御用留書なら幕末の八戸家や盛岡藩の様子も良くわかる資料であるため、ぜひこれを活用したい。そして、市史編さんを進めるにあたっては市民の方々にも資料を読んでいただいて、資料を共有化していきたい、私が執筆に関わるのであれば、そのように読んでくださった方々と一緒にまとめていく、そういった時に市民の方々が通読していると非常に心強い、御用留書に関してはどのような形式で刊本にするかは未定だがこれは土台になる資料だということではまず活字化を進めているということ。それと、前の市史は近世に関しては領主の歴史で終わっていたので、今後は市民の方々に古文書を読む訓練をしながら、いずれは調査をしていって古文書の発掘もしていただけるようになれば良いということで、このような作業をしていただいている。

熊谷委員 このような御用留書のような資料集も刊行されるだろうし、先ほど小向部長がおっしゃったように館跡関係の市史編さんに向けての基本的なデ

一タを整理した報告書なども刊行されるだろうし、色々な形で情報を市民が共有できるような体制を作り、その上に市史が作られていくという形をとれば、資料編というものにこだわらずに出来上がったら出すというようにすれば良いと思う。

兼平委員 大分これには時間がかかるので、近世の場合は早めに古文書を読んでいくということで進めている。

菅原委員 遠野南部家の資料ということでお話がでているが、下宮守と達曾部は大迫代官所の管轄であり、私が知っているのは天保7年の百姓一揆の時に、下宮守と達曾部の方の名前が出てくるのだが、達曾部がその時、打ち壊しにあっていて、そういった大迫通りのことについても誰か目を通していただければと思う。もう一つ、広報活動についてだが、市広報で一度特集を組んでいただいて、頼りになるのはどちらかというところとご年配の方なので、その方々はホームページをみるのが少ないと思われることから広報の特集で市民の目に触れていただいたほうが良いと思う。

赤坂委員 遠野文化研究センターで遠野学叢書も作っているが、今は郷土史の研究をしていた方々が少なくなり、次の世代にどのように繋いでいったら良いかが最大の問題となっている、そういう時にこれまで刊行されていたものを復刻するとか、遠野古事記の勉強会を行うなど、そのようなこれまでの調査研究の成果を市民の共有財産とするということが、この10年の市史編さんの最大のテーマだと思っている。次の世代のために可能な限り資料集を作るとかデータベース化する、見れる場所を作るなどをして人材育成をしなければならないと思う。そのくらい世代交代が難しい時期である。だからこそ、今なぜ市史編さんなのかということをごきちんと市民に伝えていかなければならないと思う。

大橋委員長 通史編の基本構想の作成については、本日の委員のご意見によると、全体的な基本構想が必要だということなので、どうしても通史編の基本構想を作っておかないと、現代編や民俗編などの編さんに関わってくるということから、通史編基本構想を来年度はしっかりと策定する、策定にあたり今日の段階では皆さんから助言をいただきたいと思う。前回の市史は第1巻から4巻まで通史という形で刊行されているので、今回新たに編さんする際の注意点等をご助言いただければ4月の会議の際に充実した話し合いができるのではと思う。

赤坂委員 ぜひ編さん委員の方々に対し聞き取り調査をして欲しい。多くの経験をされている方々なので。

熊谷委員 私は遠野というのは、一つは海と陸とを結ぶ境界にあるところ、海と陸を結ぶ街道、それが一つの基軸になるものだと思う。それが横のラインであるが、それと同時に近世は八戸との関わりも含めて今度は縦の基軸がある、横の軸と縦の軸というものが遠野という場所を支えてきた基本的な枠組みではないかと思う。また先ほど委員長のほうから前回の市史の話も出たが、前の市史の考古の部分を見ると、現在の原始、古代の捉え方とは大きく異なっているため、先ほど話した横と縦の枠組みのなかで遠野の原始、

古代史というのは大きく変わってきており、東北とか日本列島という枠組みの中で捉えられるようなデータは集まってきているわけなので、そういったものを盛り込んだ市史にしていきたいと思う。

斉藤先生

何冊くらいの通史編が可能なのかというのは大きく関わる。熊谷委員がおっしゃったように昔の段階で作られたものと、現在の調査、研究の進展を踏まえたものを作ろうとすると大分違うものになってしまうので、余裕があるのなら十分に作りたくなるのだが、まず一つはどのくらいの分量のものが作れるかというのが前提になると思う、二つめには今の学問の研究を踏まえた編目案を必ず作らなければいけない、三つめには、前回の市史とズレが生じる部分がある、それは以前は江戸時代の大名家が作った歴史をそのまま市史に書いていたということから生じる。そこをどう直していくかが恐らく課題として出てくると思う。気づいた点はこの三つである。だからどの程度のスタンスでできるのかを示していただければと思う。

藤田委員

私は遠野南部家との窓口役ということでその調査に携わることになると思うが、斉藤科研の調査で近世文書の暫定リストを作ったのがあるが、その内容について詳細は調査していなかったもので、そのリストをベースにしながら市史として掲載したい資料について再調査をしたい。またその他に遠野の博物館、図書館のほうにも埋もれている資料があると思われるので調査を進めていきたい。

兼平委員

市史を作っていくうえでは、市民の方々と一緒に作り上げていかないと市史を作る意味が半減以上も減ってしまうので、市民の方々を巻き込んで作っていききたいと思う。そのため、市史編さん講座等で市民に呼びかけ等を行い、資料と発掘やフィールドワークもしながら進めていただきたい。

また、市史編さん室の職員の方々も他市町村の市史編さんについて視察等を行い状況を知っていただきたい。言っていただければ、紹介もする。

近世については、領主だけではなく民衆についての記述もなければ新しく作る意味がないと思うので、そちらを含めて進めていきたいと思う。

熊谷委員

横手市史や能代市史も面白いと思う。もちろん八戸市史も。やはり大きく変わったのは青森県史からではないか。

赤坂委員

できる限り委員の先生方が存分にできるように、熱意と市民の巻き込み方一つで何冊になっても良いということになると思うので、とにかく基本構想をある程度まとめた段階で、先生にシンポジウムのような形で市民の皆さんにこういう市史を作ろうとしているということをきちんとお伝えするというのを、来年度中にしたいと思う。

松本委員

私も古文書のほうに取り組んでいるわけだが、資料編として完成した都度発刊していったほうが良いのかなと思う。

山影委員

大切なのは市民参加で進めなければならないという意見があったので、その参加方法についてご助言をいただきたい。

菅原委員

まずは年表を時系列で整理をして、それを先生方にお見せしてご意見をいただいていくという方法で良いのかなと思う。

佐々木委員

出来事を時系列的に並べるだけであれば、両市村の 50 周年記念誌があ

るわけだが、出来事の背景にあることを大きく取り上げた読みやすい現代編を作ってもらえればと思う。

小向部長

正直申し上げて、私たちも全くの手探りであった。本日委員の皆様から市史は歴史書であるというご意見をお聞きし、我々行政の職員はついつい年代にのっとった出来事という形式になりがちだったなということを感じ、反省した。ただ、市民協働で作りたいというのは当初からの思いであったので、たくさんの市民に関わっていただきたいというのを考えていた。

今日のご意見をお聞きし、やはりご忌憚のない意見をいただくということはとても大事だと思うので、またこのような議論を交わしていただきたいということと、改めて皆様にもう一度文書でご意見を伺う機会もあったほうが良いのかなと思ったので、後で検討させていただきメール等でお知らせしたいと思う。今後の皆さんのご意見をいただきながら、計画が変更になるというのは当然想定はしているが、大きく刊行スケジュールが変更になるのは予算にも関わってくるため本日お示ししたスケジュールで進めさせていただきたいというのは私どもの思いである。また、今回民俗編に関しては話をしなかったが、文化庁の事業で歴史文化基本構想というのがあり、その策定を来年度から進めたいと考えている。この計画の要件に、民俗の悉皆調査というのがあり、調査費用にも補助が出るためこの計画の策定をしたいと考えているところ。その見通しが立ったら皆さんにお伝えできると思うが、そのような計画もあるということをお伝えする。

大橋委員長

その他、何かございますか。  
(なしの声あり)

## 5 閉会（前川次長）